『夫 ヨセフの経験』マタイ1:18-25

1:18 イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。
1:19 夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。
1:20 彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。
1:21 彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。
1:22 すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、
1:23 「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。
1:24 ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。
1:25 しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。

●序論
ある人が言います。イエスの父ヨセフのことを。クリスマスの時だけ、しかも教会でだけ思い出される、「季節限定の登場人物」という風に。
それでも、本物のクリスマスの物語において、このヨセフは重要です。
それは、このクリスマスに、神さまに用いられた名わき役であったからです。
　大切なことは、その役割を与えられて、”神さまに用いられている”ということです。

●本論
Ⅰ．新しい人生が示されている
　　:1　アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。
　それは、かつての王家の血統を示すのにふさわしい系図…かと思いきや、そうではない。しかもそれをイエス・キリスト（救い主キリストの系図）と示しているのです。

　　タマルという女性は夫に先立たれ、舅であるユダからは忘れ去られた女性でした。
　　またラハブという女性は異民族の遊女…ダビデが策略によって奪い取ったかつてのウリヤの妻バテシバがいます。また、ウジヤやアハズ…など。
　イエス・キリストの系図として、マイナス印象のある名も記しています。むしろマタイは、包み隠さず、あえてわかるようにわざわざ示しています。
　振り返って、わたしたちは、ときに、自分の生い立ち、自分の歴史やルーツにある、目を背けたい部分を覆い隠して生きることがあるかもしれません。
　また逆に、そういうルーツを恨んで過ごす人もいるでしょう。

それがその人のアイデンティティのすべてとしてしまっているかのように。

ここで聖書の一つの言葉に注目していただきたいことがあります。
「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図」とまで語りながら、イエス様が、”血筋として”父のヨセフにつながっていないことがわかります。
「 1:16 ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。」
ここには、ほかの人のつながりと違い、「ヨセフによって」「ヨセフからイエスが生まれ」たとは記さず、「マリヤの夫ヨセフ」とだけ表現しているのです。

イエスの誕生を知らせる天使の言葉にこう示されています。
1:20「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。」
聖霊によって、こに神の子、救い主イエス・キリストの系図が”新しく作り出された”、挿げ替えられた…ということです。

現実のわたしたちは、自分の不完全な足りなさを知り、また覆い隠したくなるような生い立ちや、家族、また環境、それ故の悩みを持っているかもしれません。
聖書はそんなわたしたちに、イエス・キリストをにある全く新しい家系を生み出されることを語るのです。
★ヨハネ1:12-13
しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。 それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

聖書ははっきり語ります。神さまが、心からわたしたちを愛し、わたしたちを新しくし、人生を新しくし、祝福してくださることを語るのです。　だから、信じてキリストにある人生を受け入れてほしいと語るのです。

ここでヨセフは、自分の人生に神の祝福を受け入れています。そして自分の計画や力によらない、神さまの祝福に仕える者とされていきました。
まさに聖霊なる神さまが、彼の人生にも介入されたのです。そしてすべてを新しくしてくださったのです。だから、そこに人知を超えた新しい「希望」が生まれ、「愛」が生まれました。そこで「優しさ」が生まれ「信頼」が生まれたです。
2コリント5:17-18a だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。これらのことはすべて、神から出てているのです。
まったく新しい神さまの霊的御業がはじまります。それは、現実のわたしたちの人生と生活、そして周囲をも作り変えることができるほどの、主の霊的な御業なのです。

Ⅱ．自分の道を主役に譲る

ヨセフがいかに敬虔な信仰者であり、誠実な人であるか…ということ。その彼が、婚約者マリアの懐妊を知って、どれほど苦悩したかということが描かれます。

1:18 イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。

1:19 夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。

ヨセフにとって、かわいい妻を迎え、そして家庭を築き上げるという将来は、希望にあふれたかけがえのない夢でした。

そんな彼の計画した人生が、マリヤの予期せぬ懐妊を知って壊れていく。だから、彼は苦悶したのです。　離縁への決断は、「正しい人」であるが故の結論であり、またマリアを愛するが故の決意であったことも見て取れます。

そんな彼に、天使を通してみ告げがありました。

1:20 彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。

1:21 彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

いきなりの言葉でした。それを自分に置き換えてみましょう。

自分の思いや計画をわきに追いやって従いきることができるだろうか…。

わたしたちは、信仰生活の中でチャレンジを受けることがあるのです。

★あなたの人生に、キリストという主役を迎え、主役に道を譲る、譲り切る…、そういう本当の備えがありますか？…と。

ヨセフは、その人生においていつでも、神様を主役として尊んできた、そういう意味で「正しい人」でした。そして彼の答えは当然のものとなったのです。

それはあのマリアの信仰にも見ることができます。天使へ答えています。

ルカ1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。

…ですから。

Ⅲ．神に動かされる者となる

映画「マリア」のノベライズ本の中に、ヨセフがその夢から目覚める時の情景が描かれていました。

”急に起こった風の音でヨセフは眠りから覚めた。起き上がって暗闇の中で座った。現実に引き戻されたが、ヨセフは不思議な平安に包まれていた。”

「不思議な平安」。それは霊的な祝福が心に満たされた平安です。

1:24 ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。

さらっと、描かれているヨセフのありさまに、気負いは感じられません。

ヨセフはそうして、「神さまに動かされる人、用いられる人」とされていったのです。
今日、聖書を通してわたしたちは、信仰の有り様を問われます。はたしてわたしは「神さまによって動かされる人間？」「用いやすい人か？」ということです。

ヨセフが「正しい人」と呼ばれる理由は、その生活すべてが、「信仰生活」「霊的生活」だったからです。祈りと賛美、礼拝が伴う生活だったからでしょう。
そうして、「神さまを主役として、神に用いていただく者」としていただいていたということです。

●最後に
こんなヨセフの人生に、皆さんは魅力を感じられるでしょうか？　またこのヨセフのような、主に動かされ、用いられる、良い脇役となることができるでしょうか。

あのヨセフのように、イエスさまを主とした舞台に、わたしたちは招かれています。悪役ではありません。イエスさまを愛し、従い、用いられる者として召されています。
そこに「不思議な平安、不思議な喜び」があります。それがヨセフの経験であり、また新しくされた、わたしたちの人生の経験ともされていくのです。

もし自分のためだけに、自分のやりたいことや計画のためだけに、自分の方が神を利用し、自分の人生を費やしていくだけなら、本当の喜びも平安はありません。
でも神さまを求め、その御言葉をうけとり、神さまを主役として生きていくとき、本当の意味での喜びと平安、そして永遠のいのちの満足をも受け取ることができるのです。これは人間の知恵から生まれたものではありません。霊的な祝福です。

来週の礼拝でも取り上げるマリヤの言葉をここで先取りしておきましょう。
> 1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。

あの有名なマリヤもまた、このイエスさまを主人公とした物語の中で、神さまに動かされる人、用いられる人でした。そしてマリヤもヨセフも、まさに祝福された夫妻として、このクリスマス物語の中で用いられています。

どうか、皆さんの人生も、この主の物語の中で用いられるものとなりますように。